

研究報告書
特定課題：小児がん
(平成25年度)

平成28年 4月25日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 高山昭三 殿

研究施設 国立研究開発法人国立成育医療研究センター

住 所 〒157-8535 東京都世田谷区大蔵 2-10-1

研究者氏名 佐藤 聡美



(研究課題)

小児がんの子どもを亡くした母親のグリーフケア

平成26年1月17日付助成金交付のあった標記指定課題について研究が終了致しました
のでご報告いたします。

<研究の背景および目的>

グリーフケアは成人がパートナーや自分の親を失った悲嘆（グリーフ）からの回復が理論の骨子となっている。しかし、小児がんは親が子どもを亡くすという点で、成人を亡くすのとは異なる心痛が生まれると考えられる。その理由は大きく3つ考えられる。第一に、子どもを亡くすことは、母子間のアタッチメントによる身体的関係を喪失する。子どもは母親を無条件に信頼し、心配や不安などの心理的危機を感じれば、母親に身体的に「くっつく（アタッチする；attach）」ことで、安心感を得ようとする。そのような「くつつくーくつつかれる」身体的関係が失われる。第二に、子どもの未来の可能性を失う。子どもが成長して何者かになっていくという楽しみと可能性を失うことで、親も自分の可能性を喪失したかのように感じる。第三に、「Aちゃんのお母さん」という社会的役割を失う。このように、母親は子どもとそれに付随する役割や未来の可能性をも喪失する感覚に襲われる。

ヴィデカーシャーマンは、亡くなった子どもに対する気持ちを別の対象に置き換え、愛情やエネルギーを積極的に再投資することが悲嘆を解決する適応的なやり方であると主張している。そこで本研究では母親を対象にし、子どもを亡くした後の生活についてインタビュー調査を行い、心理的な適応について検討した。

<研究の成果と考察>

小児がんの子どもを亡くした母親5名に1時間半から2時間にわたる個別のインタビュー調査を行った。録音データはテープ起こしをし、KJ法により分析した。その結果、5名ともに社会から距離をおく時期があり、その後小児がんの子どもに対するボランティア活動や仕事を始めたり、新たに子どもを出産したり、アイドルを追いかける活動を行ったりしていた。ヴィデカーシャーマンは、亡くなった子どもに対する気持ちを別の対象に置き換え、愛情やエネルギーを積極的に再投資することが悲嘆を解決する適応的なやり方であると主張している。確かに、今回の調査対象者も、しばらく社会から距離をおいた後、新たな活動を始めており、それらはエネルギーの再投資として考えられた。

しかし、エネルギーの再投資が必ずしも心理的な適応には結びつかない可能性も示唆された。たとえば、小児がんの子どもに対するボランティア活動により、ある母親は亡くなった我が子に対する後悔を思い出したり、また別の親は医療構造の背景を知ることによって残念な思いをしたりするなど、二次的な感情の揺さぶりを体験していた。

また、子どもに関しては、新たに生まれてくる子どもに熱心に関わる場合と、残されたきょうだいの子育てに力を入れる場合が見られた。いずれの場合も、親の心のなかで亡くなった子どもとの比較が行われていた。最も顕著な比較は、新たに生まれた子どもや下のきょうだいが、亡くなった子どもの年齢を追い越すとき、亡くなった子どもはもはや成長することがないのを痛感していた。同時に、親は残された子どもにまた病気や災難が起こるのではないかと恐れを抱いていることもあった。アイドルに夢中になった親は、きょうだい児と一緒にライブに出かけることを楽しみにしていたため、これも子どもへの再投資

であると考えられた。一方、亡くなった子どもへの思い入れが強すぎて、残されたきょうだいへの愛着がわからない、可愛がれないというケースもあった。

エネルギーの再投資先が直接的に小児がんに関わるほど、親は子どもを失った事実直面化させられ傷つくこともあった。しかし二次的に傷ついてでも、もう一度小児がんの活動に関わろうとする場合は、そうすることで解消しようとしている感情、特に怒りが語られた。5名中3名は、自分の子どもが亡くなったという現実に対する怒りを語り、そのうち1名はさらに怒りをほかの家族構成員に対する不満に転化していた。

したがって、小児がんで子どもを亡くした母親のグリーフケアには、悲嘆の共有と同じくらい、怒りを鎮めるプロセスが重要だと考えられた。また、残されたきょうだいと親のアタッチメント（愛着関係）の再構築も新たな課題であった。今後は、母親の悲嘆と怒りを収めていく具体的な方法について調査を深めていきたい。